

Title	東日本大震災の遺児たちと出会って
Sub Title	
Author	長沼, 孝義(Naganuma, Takayoshi)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2012
Jtitle	人間教育講座：社会を知る自分を知る自分を育てる (2012.), p.147- 183
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20120000-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東日本大震災の遺児たちと出会って

公益財団法人みちのく未来基金代表理事
カルビー株式会社上級副社長執行役員

長沼 孝義



ながぬま・たかよし 一九四九年生まれ。宮城県出身。明治大学卒業後、一九七六年カルビー株式会社入社。中部事業部長を経て、二〇〇一年に取締役執行役員に、二〇〇九年六月に上級副社長執行役員に就任、現在に至る。また、二〇一一年十月より、公益財団法人みちのく未来基金代表理事。

「公益財団法人みちのく未来基金」は、東日本大震災で両親またはどちらかの親を亡くした子どもたちの高校卒業後の進学を支援する奨学基金。カゴメ株式会社、カルビー株式会社、ロート製薬株式会社の三社が発起企業となって実現した。入学から卒業までの学費を一人年間三〇〇万円を上限に給付。返済不要。基金は約二五年間にわたって継続支援する予定。

二〇一一年三月十一日、あの日

東日本大震災が起こった二〇一一年三月十一日は、カルビーにとっても忘れられない一日です。この日、カルビーは東証一部に上場しました。午前中に上場しまして、午後から記者会見を行っていたのですが、その最中、午後二時四十六分に東日本大震災が起こりました。会場もものすごく揺れ、記者会見を途中で打ち切って本社に戻り、すぐに対策に入った——そういう意味で、カルビーにとってこの日は一生忘れられない日になったのではないかと思います。

この日の記憶は日本中でだんだんと風化してきていますが、ここでもう一度あの日のことを振り返ってみたいと思います。マグネチュード9という巨大な地震の後にたいへん大きな津波が青森から茨城にかけての沿岸を襲い、たくさんの方が亡くなりました。そして、親を亡くしたたくさんの方の震災遺児が生まれました。震災遺児たちは一七〇〇名いると言われています。当時、この子どもたちがどんな状況だったのかを紹介したニュースを少し見ていただければと思います。

二〇一二年三月放送の「ニュースZERO」より

「家族七人を亡くした十八歳 三浦美咲さん」

◎ナレーション「去年四月、私は宮城県気仙沼でひとりの女子高校生と出会いました。三浦美咲さん。津波で家族七人全員を亡くしました。あの日から一年。美咲さんは追悼式で家族一人ひとりに今の思いを語り

かけました。

私が美咲さんと初めて出会ったのは震災から一カ月後の、去年四月。この時、美咲さんは津波で流された自宅に毎日通っていました。瓦礫の中から探していたのは家族の思い出の品です。イチゴ農家のお父さんが仕事で使っていた包装紙」

三浦美咲さん「自分のものよりもお母さんたちのものが欲しいんです」

◎ナレーション「見つけ出したお母さんのプレスレットは大切なお守りになりました。一緒に暮らしていた家族七人全員を亡くした美咲さん」

美咲さん「泣かないです」

キャスター「泣かないの？」

美咲さん「泣かないです」

キャスター「決めたの？」

美咲さん「決めました」

◎ナレーション「あれから一年。今月、美咲さんは高校を卒業しました。今は気仙沼市の親戚の家で暮らしています」

キャスター「震災から一年経つけれど、美咲ちゃんにとってどんな一年でしたか？」

美咲さん「どんな一年？ たくさんの人から支えられた一年だったと思います」

◎ナレーション「今、家族で暮らした家は土台だけが残っています」

美咲さん「かたちとしてはないけれど、何ていうのかな、自分の中には残っているというか、うん、だから、大丈夫……って感じですよ」

◎ナレーション「自宅近くにあるお寺。家族七人が供養されています。おばあちゃん、おじいちゃん、ひいおばあちゃん、お母さん、二人の妹・美輝ちゃんと美穂ちゃん、そしてお父さん。美咲さんは五月から今の家で暮らしています。友だちの存在も美咲さんを支えています」

美咲さん「なんか、今の生活になじんじゃってる自分がいやっていう……、なじんじゃってるんですよ、たぶん。よくしてもらって、ここに帰るのが当たり前になって、あの日のこと忘れるのかなみたいなの。ちょっとわかんないぐらいです」

キャスター「そうか……」

◎ナレーション「追悼式の壇上で美咲さんは家族一人ひとりに語りかけました」

美咲さん「美輝、どれだけこわかった？ 考えるだけで、守れなかったこと、悔しくてたまりません。『みいちゃん』って走ってくる姿、両手を上げて寝ている姿、いとおしくて、いとおしくて、生まれてきてくれてありがとう。美穂、小さい頃から何をするのも一緒でしたね。ずっと一緒にいたから、ありがとうひとつ言うのも恥ずかしかったんだ。今になって本当に思うよ。こんなうちのこと、ねえちゃんと呼んでくれてありがとう。お父さん。毎晩飲んで、ご飯と一緒に食べることも少なかった。二〇歳になったら、一緒に飲ん

だりしたかったです。お母さん、うちの理解者で、理想で、あこがれです。『お母さん』って呼びたくて、『美咲』って呼んでほしくて、自慢の娘になりたくて、少しでもお母さんに近づきたくて、お母さんみたいなお母さんになりたいです。たくさんの方から『すごいね』『強いね』『偉いね』などの言葉をいただきました。でも本当にすごいのは私の家族だと思います。『すごいね』って言ってもらえる子どもを育てた私の家族はもっとすごくないですか？ 家族と友だちが私の自慢で財産です。今という時間は変わってしまったけれど、お母さんたちは私の中に生き続けています。『ただいま』、そう言える日が来るまで見守っていてください」

◎ナレーション「美咲さんはこの春、仙台の大学に進学が決まり、一人暮らしが始まるのです」

美咲さん「管理栄養士の資格を取得して、栄養教諭になりたい。震災で味わった食のありがたさをふまえたうえで、食の大切さを伝えていければいいなって思って、その仕事に就くことをめざし始めました」

ナレーション「夢に向かって美咲さんは新たな一歩を踏み出します」

(ビデオ終了)

美咲さんが栄養教諭になりたいという夢をもったきっかけは、震災後の体験にあります。彼女は家族を探して避難所を転々としていて、一カ所の避難所にいなかったために、食事にありつけることができなかつたんです。自分の食事よりもお母さんやお父さん、妹たちを探して、あちこちの避難所を歩きまわっていた。一カ月間、一日ほとんど一食も食べられないという生活を送っていました。美咲さんは、その時に感じた食への強い思いをなんとか自分の職業につなげたいという思いで大学に進学し、今、栄

養士への道をめざしています。

遺児たちの高卒後の進学の環境

震災遺児たちの高校を卒業後の進学をめぐる環境は大変厳しいです。

遺児たちの多くは、「残ったいざれかの親、あるいは預けられた里親や親戚に迷惑をかけられないから、進学をあきらめる」というようなことを口々に言っていました。その背景には高卒後の進学を支援する仕組みがほとんどない、あるいはあっても大変難しかったからです。

震災関連の支援はたくさんあるのですが、そのほとんどが高校卒業までを対象としていて、高校卒業後、大学や専門学校、短大への進学に対する支援はほとんどないというのが実態です。仮に支援があるにしても、そのほとんどに「一律公平」という壁があります。特に行政の場合は「公平」という問題が最大のネックになるわけですから、ひとり一律月五万円、一〇万円というように決まっている。つまり、個々人の状況に応じた対応ができないのが多くの支援の状況です。

一方で、震災被害を受けた方たちがさまざまな支援を受けるためには、まず申請手続きをしなければなりません。ところがこの申請手続きというものが複雑怪奇で、何十枚もの書類を出さなくてはならず、実際には役に立たないという現実があります。特に進学問題に関しては高校の進学担当の先生はたいへんに頭を抱えていたという状況がありました。

三・一の子どもたち

震災当時、大船渡高校の二年生だった佐々木瑠璃さんという子がいます。「トランペットの少女」として朝日新聞で紹介されたことがあるので、この記事をご覧になった方もいらっしやるかもしれません。彼女はお母さんを亡くして進学をあきらめたところでしたが、なんとか私たちの「みちのく未来基金」と出会って、現在福島医大でたいへん元気に勉強に励んでいます。

読売新聞で紹介されたのは昆愛海ちゃんこんまなみという宮古の四歳の女の子です。「愛海」とはお母さんがつけた名前なのに、その海に裏切られたと家族の方はおっしゃっていました。お母さんが見つからないので、愛海ちゃんは手紙を書くと言って、「ママへ。いきているといいね。おげんきですか」というところまで書いて、疲れて眠ってしまったという写真が読売新聞に掲載されていました。

こういう震災で親を亡くした子どもたちが約一七〇〇人いるわけです。

「みちのく未来基金」設立の狙い

こうした状況をなんとかしたいと、カゴメ、カルビー、ロート製薬の三社で共同して設立したのが「みちのく未来基金」という奨学基金です。東北の未来を支える震災遺児たちの進学支援をすることを目的としています。

こういう子どもたちこそが、実は被災地の復興の原動力になる。こういう子どもたちがこの地を立ち

上がらせる。だから、この部分にしっかりとした支援をしなければとまず考えました。そして同時に、行政にはできない、われわれ民間ならではの支援をしようと思ったわけです。子どもたち一人ひとりが持つ夢はそれぞれ違います。大きさも違えば、方向性も違う。そうした夢を、一人ひとりの状況に応じて支援しようではないか。ある意味では一律公平ではないわがままな支援がどうしても必要なのだと考えました。

主な支援内容

まず、大学や短大、専門学校の入学金と授業料を返済不要ですべて給付することを決めました。ただし、一年間の上限は三〇〇万円です。この金額についてはいろいろと調べた結果、年間三〇〇万円あれば、ほとんどの国内の大学、短大、専門学校への進学が可能だとわかりました。ごく一部の私立大学医学部など特殊なところは難しいのですが、国公立大学の医学部ならほぼこの三〇〇万円で進学が可能です。

そして給付対象者の人数制限を設けていません。毎年何名という枠がいろいろな問題を起すこともありまますので、とにかく合格すればいいという条件で、何十人でも給付することにしました。

奨学金を併用受給できないというケースが多くあります。こちらからもらったら、よそからはもらえませんがよという状況がとても多いんですね。このみちのく未来基金の場合は、他の奨学金と併用受給を可能にしました。ですから、生活のためのいろいろな支援は別の奨学金や生活給付でまかなって、授業

料など学校でかかる費用はすべてこの基金がもつ形、生活と学習が両立することを考えました。

そして、みちのく未来基金は、今年（二〇一二年）の春から進学する人を対象としてスタートしました。つまり先ほどの三浦美咲ちゃんや佐々木瑠璃ちゃんが第一期生になるわけです。いつまでやるのかというと、将来、昆愛海ちゃんが大学などに行きたいと思った時にもこの基金はあります。愛海ちゃんは震災時に四歳でしたから、彼女が一八歳になる一三、四年後にもこの基金はあるわけです。震災の時に生を授かった赤ちゃんが将来進学して卒業した時点で、この基金はやめるというプログラムにしました。それまでにおそらく二五年ぐらいはかかるだろうと考えております。

活動履歴

こういった基金を立ち上げる場合にはある一定のプロセスが必要で、時間がかかるものですが、この基金に関してはたいへんな猛スピードで立ち上げることができました。

二〇一一年七月十一日、三社のプロジェクトが開始しました。六名で、どういうかたちにするかを話し合い、まず約一カ月後の八月十日までにすべての企画案を固め、活動をスタートさせることを決定しました。どうしてこんなハイスピードに進めたかということ、実は現地を歩いていてわかったのですが、高校三年生は夏休み中に進学か就職かを決めなければならぬ、そういう期限があるからです。こういう支援があれば、進学をあきらめる子が少なくなる、進学する決心がつくはずだと、なにがなんでもこの案は遅くとも八月のお盆前につくることにしました。

この期限に何とか間に合わせることができて、九月には記者会見を開いて基金設立を発表しました。十月二一日には宮城大学に拠点を置き、具体的な活動がオフィシャルにスタートしました。オフィシャルにというのは、実際にはそれ以前から高校を訪問して、「心配しなくても大丈夫だから」と高校の先生たちにはずっと伝えて歩いていたからです。そして、幸いにもたくさんの方の支援を得て、十二月一日から公益財団法人「みちのく未来基金」としてスタートすることができました。

奨学基金活動が早期に実現できた要因

内閣府からは、こんなスピードで公益財団法人を認定したのは初めてだと言われました。どうしてこんなに早くできたのかというと、実はそこにはいろいろな背景があります。

まず、岩手、宮城、福島の三県の「高等学校校長会」の会長さんたちのおかげによるところがあります。宮城県は仙台二高の校長、岩手県は盛岡一高の校長、福島は安積黎明高の校長さんですね。この三人が「こういう基金があるならなんとしてでも高校に伝える」とがんばってくださいました。実はそれまで教育委員会などに働きかけていたのですが、個人情報保護法などいろいろな問題があつて、まったくどこにも紹介してもらえない状況で悩んでいたのです。そんな時にたまたまこの三人の方に会うことができて、この方たちがそれぞれの県の高校に「こういう基金が生まれる。だから会って話を聞いてやってくれ」と伝えてくれました。これは大きかったです。

それから地元の個人や法人が現地サポーターとしていろいろな支援をしてくれましたし、さらに、先

ほど申しましたように、公益財団法人の認定委員会、あるいは内閣府が全面的に支援してくれました。私は生まれて初めて役人を信用しましたし、こういう役人がいるのだと心から感謝しました。実は定款作りまで全部手伝ってくれたんです。こうした内閣府のスタッフの支援がなければ、公益財団としてスタートはできず、一般財団のままだったと思います。

もちろんこの三社のチームワークもあると思います。カゴメ、カルビー、ロート製菓の三社は、実は企業規模や社風が似ているんですね。いずれの会社も一五〇〇億〜二〇〇億円手前ぐらいの企業規模です。この共通項が多いことに大きな意味がありますし、また後ほど紹介しますが、経営陣の哲学も似ています。ですから、あつという間に意思決定をすることができました。普段、企業の意思決定は時間がかかることが少なくありません。しかし、この基金のスタートに関してはおとにかくスピードを優先すること、三社の経営陣が一致しておりました。また、現地に入ってこの基金の実際の活動を担当しているのは三社の社員から公募で選ばれたスタッフです。三社の社員が積極的に活動へ参加してくれています。こうしたさまざまな要素が組み合わさって、寄附される方たちからもどんな活動をしているのかわかりやすいという声をいただいています。

基金運営の主な内容

カゴメ、カルビー、ロート製菓の三社はこの基金に対して毎年三〇〇〇万円ずつお金を出し、もし足りなくなれば、三社で追加します。そしてこの三社が出したお金は運営費などさまざまな経費に使われ

ます。つまり、発起三社以外のすべての寄附金は全額子ども奨学金にあてる、子どもの奨学金以外は一切使わないことを決めています。

先ほど申しましたように、スタッフは発起三社からの公募によって編成しました。各社からそれぞれ十数人の応募がいましたので、その中から面接によってそれぞれ二、三人を選びました。現在七名が仙台で常勤スタッフとして、私を含めた四人が非常勤として、合計十一名で仙台を中心に活動しております。若いスタッフが多いように思います。

スタッフたちは自分が所属していたそれぞれの会社がこの活動をやっていることを誇りに思うと言ってくれています。自分がすごいことをやっているとは思っていない。でも自社がこの活動をやっていることを誇りに思っているのです。これが一番大きいのではないかと思います。

実はここに参加しているスタッフたちは、ある意味では企業の中の出世レースからは一端退くわけですね。企業というのは、入社して同期がいて、いろいろな意味で競争がある。これはどんな会社でも否定できない現実です。ここにいるメンバーはその競争から一端離れる決心をして基金に回るわけです。そのことが、自分にとつての価値であり、自分が人間としてまずやらなくてはいけないことはこっちなんだと決心して来るわけです。

さらにありがたいのは、今でも「ぜひこの活動に直接参加したい」と言ってくれる社員がたくさんいることです。ともすると、企業の中で出世レースや出世争いなどをやりあう中で、こういうことに関心をもつ、失礼な言い方をすると、優秀な社員が基金に回るんです。会社の中で落ちこぼれた人間が来るわけではないんです。この人間が現場から離れてしまったら困るという人間が応募して基金に回るんで

すね。こういうことを通して企業の中に新しいある種の文化のようなものが生まれくるのだと、やってみて感じています。当初基金のプロジェクトをスタートした時に、社員から「何を馬鹿なことをやっているんだ」という反応があるかなと思ったら、そうじゃなかった。感動している毎日です。

また、奨学金を給付することは基金の活動のメインにあたるのですが、実はスタートしてみると、それはほんの一部の仕事であることがわかりました。今では子どもたちの相談に乗ったり、心のケアをしたりが大きな仕事になっています。

プロジェクトを始めて体感したこと

こういうコラボレーション型の社会貢献の仕組みはどうやら初めてだと言われています。単独の企業が行うことはままあるのですが、三社が手を組んでやるのは不思議だとよく言われるのですが、私自身このプロジェクトを進めながらさまざま新しい発見をしています。

まず、企業文化の違いが確かにあるんですね。三社が集まると、企業文化が違う。これはおもしろいと思います。三社のスタッフの意思決定のプロセスがこんなに違うかというほど違って、感動します。ですから、アウンの呼吸や「なあなあ」が通用しないことがたくさんあるため、何かを決める時には徹底したオープンな議論が必要になります。暗黙の了解はありえませんが、なぜこういうことをやっているのか、すべてが透明な活動になっているかを徹底的に議論します。また、三つが集まるとまさに文殊の知恵で、知恵が豊富になってきます。

さらに、企業の場合には上司やトップが決めるというプロセスがありますが、基金の場合はありません。すべてここに参加している一人名で決めます。まったく経験のないことをやっているわけですから、入社して四年目の二七歳の社員が意思決定をする経験をせざるをえません。

そして、今後の問題としては、継続を確保するための仕組みづくりという宿題もあります。

基金運営の基本方針

この基金はある種の「連合軍」ですから、運営にあたって重要なのは方針をはっきりさせておくことが重要です。われわれは三つの基本方針を決めました。

まずひとつめは「子どもたちには徹底的に温かく接しよう」です。これは基本です。ただし絶対に甘やかしません。時には厳しくしかったりしながら、本気で子どもたちと向き合っています。「遺児」というある種のオブラートをついついかけてしまうことが、どれだけ子どもたちにとってよくないことか、一年半やってきてよくわかっておりますから、時にはしかります。「甘えるんじゃない」と言うこともあります。そういうかたちで信頼関係をつくっていかないと、なかなかこういう活動はしにくいですし、子どもは相手が本気でやってくれているのかどうかを敏感に感じ取ります。

ふたつめは、すべての寄附者に心から感謝することです。五〇〇円、一〇〇〇円の寄附者もいれば、場合によっては数千万円の寄附者もいらつしゃいますが、すべて一律です。金額の多寡ではありません。こういうこともはつきりしようと決めております。また、時々こういう基金を利用して、なんらかのこ

とをやるうとする輩も出てきます。それは決して許さないと、きちんと決めています。

三つめは、この基金は三社が発起したプロジェクトではあるけれど、基金は自立したチームとして活動するという意思を明確にしております。ですから、ずっとこの三社でやることにはまったくこだわりません。参加する法人や団体があれば、彼らと一緒にやっていったほうがいいということも考えています。実際、近々もう一社が参加するところまで話が進んでおります。そして、基金のスタッフは連合軍ですが、自分の出身母体の企業に対する誇りはきちんと持って、大事にしることも伝えてあります。

基金を貫く一番のポイントは「透明化」です。お金の面などすべての活動について、誰が何の質問をされてもすべて答えられるように徹底しようと、決算報告もホームページに掲載しました。こういうNPO的なことは、最初こそ花火を打ち上げたけれど、やがて何をやっているのかわからなくなることは往々にしてあります。ですから徹底して透明化することをモットーにしております。

進学の状況

二〇一二年四月、高校を卒業した震災遺児の数は推定一二〇名ぐらいでした。そのうち九六名がみちのく未来基金の第一期生として進学を決めております。われわれは年間五〇名ぐらいを想定していましたが、二倍近い人数がこの基金を利用してくれたことは、本当によかったと思っております。そして、すでに二期の活動がスタートしています。現高校三年生の遺児は一五〇人ぐらいだとリサーチされていますが、そのうち約一三〇人が進学を希望しています。十一月末現在、AO入試や推薦入学などで六〇

名ぐらいの子たちの進学先がすでに決定しており、残りの多くは、年明けの一般入試で進路が決まるといふ状況です。

「一期生の集い」

今年（二〇一二年）三月、一期生たちがお互いにネットワークをつくれるようにと、寄附をしてくれたサポーターの方たちも交えた交流の場「一期生の集い」というイベントを二日間行いました。この集いには九六人のうち五一人が参加してくれました。引越などさまざまな事情で参加できなかった子もいるのですが、四月以降、彼ら全員と面談しています。

現在、カルビー・カゴメ・ロートの事務所を使って、毎月「みちのくカフェ（通称・みちカフェ）」を開いているのですが、ここに基金の一期生たちが集まって、いろいろな話をしています。ここで、仲間たちと自分たちの生活について話し合う、こういう場が今、有効的に働いています。

「一期生の集い」を行うと、人手が必要になり、われわれスタッフだけではなかなかできません。三社の若手社員に手伝ってもらおうのですが、カルビーの場合は内定者にも参加してもらっています。大学に入ったばかりの遺児たちが大学や大学生活についての話をどんどん聞けるようにするためには、できるだけ年が近いスタッフがいい。企業側からしてみると、子どもたちと一番年が近いのは内定者ですから、彼ら／彼女らと一緒に入ってもらって、子どもたちと会話をする時間を設けました。とてもよい時間が持てたと思っております。

寄附と給付の状況

今年（二〇一二年）九月までの寄附と給付の状況について少しご紹介します。

発起企業三社以外からのご寄附を一年間に三億三〇〇万円、約一三〇〇のサポーターからいただきました。寄附の件数が二三四五件ですから、複数回寄附していたださっていることがわかります。何回も、あるいは毎月寄附してくださるといふ特異な例がここでは起きているのです。あるご寄附者は毎週二〇〇〇円ずつ寄附してくださっています。すでに五六週目に入っていて、お名前はわかっているのですが、一切名乗り出てはいらっしゃいません。こうしたありがたいご支援をいただいております。

初年度の給付は約八五〇〇万円でした。当初は一億三〇〇〇万円ぐらいかかるとか思っていたのですが、半分以上の学校で授業料等の免除があり、約五〇〇〇万円の減免がありましたので、八五〇〇万円ですんだわけです。それぞれの大学で震災遺児や被災者に対する減免措置があり、慶應義塾大学でもあったようです。

しかし、来年また一〇〇人、再来年になるとまた一〇〇人と、ピーク時には年間三〇〇人の子どもたちを支援するわけですから、おそらく一年間で四億円弱のお金が、二五年間では四〇〇五〇億円ぐらいの給付金があるだろうと、われわれもあちこちで支援サポーターを得るための活動も展開しています。

スターボックスの支援

そのなかからスターボックスによる支援をご紹介します。

スターボックスでは「みちのく未来基金支援プログラム」として、二〇一二年九月から十二月まで支援していただきました。スターボックスではプリペイドカードを発行していますが、「ハミングバード」プリペイドカードを発行してもらうと、一枚ごとに一〇〇円がみちのく未来基金に寄附されます。さらに、このカードを使ってコーヒーなどを飲むと、その代金の一%が寄附されます。こうした支援プログラムをスターボックスの若い社員が企画を立てて、取締役会を通したわけです。

「ハミングバードカード」には鳥の絵が描かれています。実はこれが意味のあるデザインでして、お聞きになった方もいらっしゃるかもしれませんが、南米に伝わる「ハチドリの一滴」という話をもとにデザインされたものなのです。そのお話をちよつと紹介します。

「ハチドリの一滴」

森が燃えていました

森の生きものたちは われ先にと 逃げていきました

でもクリキンデイという名の

ハチドリだけは いったりきたり

口ばしで水のしずくを一滴ずつ運んで

火の上に落としていきます

動物たちがそれを見て

「そんなことをしていたい何になるんだ」

とだって笑います

クリキンデイはこう答えました

「私は、私にできることをしているだけ」

出典…『ハチドリのひとしずく』（辻信一監修、二〇〇五年、光文社）

スターバックスの若いスタッフが、この「ハチドリの一滴」の物語から、自分たちができる一滴をやるうと、このプランを作ってくれました。お金がどうのこうのというより、自分たちの一滴をこういうことにしたいという意図が、私は嬉しかったですね。おかげさまで九万五〇〇〇枚発行されたそうです。スターバックスのこれまでのさまざま企画のなかでも最高だったと言っています。九万五〇〇〇人の方にこういうかたちで「みちのく未来基金」のことが伝わったとたいへんに感謝しております。

一向に進まない被災地の復興と奨学生の気になる現状

しかし現実には被災地の状況は何も変わっていません。慶應義塾大学も南三陸に支援をしているというお話をうかがいましたが、現地にいらっしやった方はよくご存知の通り、片付いたというだけでまっ

たく何も変わっていない現状です。

従って子どもたちの現状もとても気になるところです。たとえば、われわれが会っている九六人の子どもたちのうちのひとり、関東地区の大学に進学した宮古出身の女の子は、一年半経って津波の夢を見始めたと言っていました。おそらくそれまでずっと心の中で気を張っていたのだろうと思われます。少し時間が経ってきたら、津波の夢を見始めて、彼女は恐怖を感じたようです。仲間たちと会った時に、彼女が突然そういうことを話したところ、他の子が「いや、僕も見てるよ」と一言言い、この子はほっとしていました。「私だけじゃないんだ」と安心したそうです。あるいは、宮城県内の大学に進学したある女子学生は明らかにPTSD（心的外傷ストレス障害）と思われる、睡眠ができずに、安定剤を飲み続けていると本人が話してくれています。

また、家族が行方不明という状態にある子どもたちがまだたくさんいます。このことが彼らにとって、心理的な負担になっていたり、あきらめがつかなくなったりしているようで、心の中にとてもたくさん抱えているなと感じています。

子どもたちの想い

子どもたちがどんな進学をしたかという点、看護師、栄養士、美容師、薬剤師など具体的な職業をめざす進学先が圧倒的に多かったんです。とにかく専門的なスキルを身につけて、世の中の役に立ちたいと。彼らは恩返しをしたいとよく言いますね。

一方で、残った親、あるいは兄弟姉妹たちをなんとかして支えたいということも強く意識しています。そのためやはりスキルをつけていかなければと言うと同時に、いずれは必ず高田に帰る、大船渡に帰る、宮古に帰る、石巻に帰る、そしてふるさとの役に立つと口々に言っております。

この一期生の進学先を見てみますと、残念ながら、ほとんどが本来の実力よりも二ランク程落とした学校に進学しています。つまり、震災から半年間、高校の授業も再開されない、まして進学のための受験勉強はできないという状況でしたから、たとえば東北大学をめざしていた子でもランクを落とした志望校を選ばなければならぬことが一期生では多く見られました。

現在高校三年生の二期生を見てみますと、受験的には少し落ち着いてきたようで、かなり高いレベルの大学志望が出てきています。六大学への進学者がずいぶん出てきていて、慶應大学にもおそらく二名ぐらい進学しそうな状況になっています。一名は、学部はわかりませんが、すでに内定が出ているようです。

一方では、二期生の半分が志望しているのが東北の国公立大学です。今年の特徴的な進学希望になっていて、できるだけ親のそばにいて、親の面倒を見ながら、大学に行きたい、残しておくのは心配だ、あるいは妹や弟を置いて行けない、できるだけ家から近い大学に通いたいと、約半分近くが東北三県の国公立大学をめざしています。つまり生活的な支援がいつまで続くかわからないという金銭的な問題もいろいろと考えた進学をめざしているのが特徴的に出ております。

ビデオ「震災遺児に進学の夢を」

実際に今度一期生で進学した子ども二名の声と、冒頭で申し上げましたこの三社のトップがどんな思いでこの基金をスタートさせたかというメッセージを簡単なビデオにしておりますので、是非見ていただければと思います。

●ビデオ「震災遺児に進学の夢を。先生、企業、そしてみんなですつと支えていくみちのく未来基金」

◎小林祥子さん（みちのく未来基金一期生 北日本ヘア・スタイリストカレッジ美容学科）

「前は人のために何かしたいという夢があつて、そのなかでも美容師という職業に就きたいと思つていて、『お父さん、美容師になるね』つて言つたら、お父さんが『決めたからにはちゃんとんなきやだめだぞ。おまえが美容師になつたら、一番最初に俺の髪を切らせつから』みたいな。でも父が職場で波にさらわれてしまいました。ホント、もうだめだ、あきらめようつて。お父さんも亡くなつちやつたし、お姉ちゃんは大学に通っているから、自分は就職して家族を養つていかなければいけないって思つてあきらめました。そんな時、みちのく未来基金という基金と出会つて、そして今自分の夢をかなえるために一歩ずつ前進しています。感謝しています」

◎菅野明俊さん（みちのく未来基金一期生 新潟大学工学部）

「父がいろいろ工作とかで、小さい小学一年生とか二年生の頃の工作を手伝ってくれたり、設計図の書き方というか、そういうものづくりに興味をもつきっかけをつくってくれたのが父だったので、工学部に進んで

何かをつくってみたいとか、そういう大きなものは決まっています。それで震災があつて、うちの両親が流されてしまって、家とかも全部なくなつてしまつて、すぐに大学進学というふうにはなかなか思えないというか、やっぱり働くしかない状況だと思つていたので、このみちのく未来基金さんのおかげで大学に来る事ができて、ものをつくる、特にしくみから考えてものをつくつていくことが好きなので、そういうことについて大学で勉強して、それをいかした研究などに就きたいなと今は思っています」

◎山田邦雄氏（ロート製薬株式会社 代表取締役会長兼CEO）

「東日本大震災が起つて、ほぼこれは直感的に何かしないといけない。特に親御さんを亡くされた遺児のために何かしたいというのは本能的に思い立ちました。なりたいたい仕事、あるいは職業をやりたいたいという時には、大学なり専門学校なりに行つてやっぱり勉強することがすごく大事だと思つて、その部分の支援というのが薄いという事を知りまして、夢を叶える第一歩が学校で専門的なことを学ぶことだということから、大学や専門学校での勉強の支援ということを考えました」

◎喜岡浩二氏（カゴメ株式会社 相談役）

「災害で親をなくされた人たちというのは、教育の機会を失う、たぶんたいへん困難な事態になるだろうと、勉強をみんなと同じようにやれる、平等に機会を得られるということは人間が生きて行くうえでたいへん大事なことだと思ひましたし、そんななかでロートさん、カルビーさん、カゴメ、この三社で、そういう同じ目的に向かつて基金というものを設立してやつていこうと」

◎松本晃氏（カルビー株式会社代表取締役会長兼CEO）

「われわれはこれを忘れないんだと。二十年、三十年、四十年、やっぱり忘れてはいけないんだと。少なく

とも三月十一日に生をもっておられた小さな子どもたち、もしくは赤ん坊が高校を卒業して、大学だ、専門学校だ、短大だといられるまで、二十五年間、なんとかわれわれは子どもたちのために貢献したいと」

◎山田邦雄氏

「ビジネスで収益を上げるだけでは、やはり私はこれからの日本はやっていけないんじゃないかと。企業あるいは企業家ももっとも社会といっしょに活動していこうと」

◎松本晃氏

「日本人はお互いを助け合うということに関して言うと、決して他の国の人たちに負けませんから、このような大きな被災にあわれた方に対して、広く日本人はサポートしていこうという気持ちで、三社が中核になって、今から長い被災者の方たちの戦いに、われわれは少しでもサポートして行きたいと思っています」

◎喜岡浩二氏

「これからまだ二十五年も支援があるんですから、持続的にご寄附を集めて奨学生に、という仕事を継続して続けて行く必要があります。この趣旨に賛同されるみなさんには、是非ごいっしょにご寄附に加わっていただくことでご協力いただければありがたい」

(ビデオ終了)

今日ごらんいただいたDVDは、基金をサポートする映像支援のカメラマンが無料でつくってくれたものです。みんながいろいろなかたちで参加してくれているのは嬉しいことです。

基金一周年からSNSへの投稿

この基金の大きな特長は、子どもたちが自分たちでネットワークをつくることを意識していることです。現在は来年（二〇一三年）三月に行う「二期生を送る集い」を準備しているのですが、そのスタッフをやりたい、自分たちの一年間の経験を後輩たちに伝えたいと、一期生の子どもたちが本気で言ってくれました。

また基金の中だけで見ることができるとSNSを立ち上げています。これは外から守るためにクローズにしています。特にマスコミはこういう子どもたちに対する関心が強く、何らかのかたちで取り上げて作り上げることがたくさんありました。実際、そういう目にあつた子どもたちもいます。悩んでいる子もいて相談に来るので、「もしいやだったら、断つてもいいよ」とはつきり言っています。そういう子たちの声が、SNSの中でネットワークできるしくみをつくっているのですが、最後にこの九月にSNSに投稿してくれた一期生の子の投稿を紹介して、今日の話を終わりにしようと思います。

昨日で一年半……

いつの間にかそんなに時間が経つたんだなって

TVに地元が映つてんの見て思った

この一年半、いろんなことを経験してきたし感じてきた

たくさんの人に支えられて励まされてここまで来れたんだなって
ほんといくら感謝しても足りないくらい

—あの日からわたしの生活は一変した

それまであたり前だったことがあたり前でなくなつた

水も電気も食べ物も

水がない不便さ

電気がない恐怖

食べるものがない不安

生きるって大変なんだなって改めて実感した

どうしたらいいかわからない

毎日を生きていくのでいっぱい

どれだけ泣いたかわからない

誰にも会いたくないし、何もしたくない

そんな毎日がずっと続いた

大学目指していたけど学校がいつ再開するかわからない
いや、それ以前に進学できる？ 諦めるべき？

いろんなこと考えた

お母さん一人にして東京行きたくない

学費は大丈夫かな？

迷ったりしたけれど、お母さんは背中を押してくれた

お父さんもきつと応援してくれてるよ！ って

お父さんはいつもわたしの大学進学について

真剣に考えてくれていた

いろんな大学の本を読んで付箋を貼って

のん！ ここの大学どうだ？ って

そのときは、またかよ……って

適当に聞き流したけど

今考えるとほんとにわたしのこと考えてくれてたんだなって
だから今通っている大学もお父さんが見つけてくれた大学

保育士になりたい！ っていうわたしのために

お父さんが探してくれた

ほんとに今更だけありがとう

そしてそこに通えているってことはみちのく未来基金の

方々をはじめとするたくさんの方々のおかげ

感謝の気持ち絶対忘れない

そしてわたしも誰かのために一生懸命になれる人に

なりたいと思った

感謝しても足りないけれど

本当に本当にありがとうございます

これからもがんばります

二〇一二年九月十三日 震災一年半

この「のんちゃん」は今、東京の大学に通っていて、おとといも会いました。とてもシャイで控えめ

な子ですが、お母さんのことを心配しながら一生懸命に学校に通っているようすが嬉しく思えました。

みなさまへのお願い

こういう心に悲しみを閉じ込めて、それでも夢に向かって歩む遺児たちがいることを是非覚えておいていただきたいと思えます。ともすると風化することはさげられません。私たちは活動を始めたばかりですが、なんとかして自分の夢を実現したいと思っている子どもたちがいることを、是非覚えておいていただけるとありがたいなと思えます。

質疑応答

Q1 学生A（理工学部1年生） 長沼さんが、副社長という高い地位にしながら、みちのく未来基金にスタッフとして参加されている一番の理由やモチベーションは何なのでしょうか。

A 目の前に遺児がいるからです。それだけです。待たなして夢を諦めようとしている子どもたちが目の前にいる、だからやる。これだけです。われわれのスタッフはすべて同じ気持ちでこの活動をやっています。

Q2 一般参加者 遺児たちが抱えている「心の闇」へのケアについてお聞きしたいと思います。特に

子どもたちが小学校高学年や中学生になるにつれて、こうしたケアはさらに必要になってくると思いますが、今後どうサポートされていくおつもりでしょうか。

A この問題が、われわれが現実的にこれから直面するだろう最も難しい問題になるだろうと覚悟しています。ですから今、専門的、かつ信頼がおけるカウンセラーと協議を始めているところで、何かあつたらすぐにかけてサポートできる態勢を、早く作り上げようと思っています。しかし、カウンセラーといってもピンからキリまでいまして、どんな人でもいいというわけにはいきません。企業の中でキャリアを形成してきたわれわれの経験と、そうした専門家とのネットワークを生かしていきたいと考えています。小さい子どもも含めた一七〇〇人の遺児たちを、できるだけ早くサポートしていきたいという決心は持っています。

ただ、悩んでいることもあります。高校生の遺児たちまではわれわれも把握できました。ところが中学生以下の遺児たちに、こういう基金があることをどうやって伝えるか、悩んでいます。中学生が高校を受験する動機のひとつに、いずれどんな大学を受験するかがありますし、場合によっては小学校から中学受験をする子たちもいます。ですから、できるだけ早く裾野まで、この基金の存在を認知させたいと思っていますが、なかなか難しいのが現状です。

たとえば岩手日報はたいへんなサポートをしてくれています。基金関係の記事などを定期的に掲載して、情報が震災遺児たちに届くように努力してくれています。一方、メジャーなマスコミはそうしたじっくりした活動をやってくれないという現実がありまして、難しいですね。ただ、できるだけだけの範囲の中で、今のご質問に答えられるようなことをやっていく覚悟を持っております。

Q3 大学院ビジネス・スクール教員 私は塾内で震災対応のプログラムを行ってきましたが、最近になって思うことは世間の関心がきわめて薄れていることです。こういう活動をする時に、企業が拠点になるのはいいことだと思うのですが、世間とのズレなどをどうやってビジネスの観点から集約していくのかという点について一言いただければ幸いです。

A こういう支援活動を長期にわたって継続的に行うことは、はっきり言って、たいへんに困難です。それは資金的な面も、活動の労力的な面でもたいへんであることは覚悟しております。

ただ、われわれは三社だけでこの活動を続けていくとは考えていません。常々、どうやってネットワークを広げて行こうかと考えておりまして、さまざまな企業と相談しながらやっております。もちろん三社だけで続けていくことはできません。三社で二五年間、おそらく四〇〜五〇億円かかるなら、それだけ出して活動していけばいい——こういう覚悟はできるのですが、しかしネットワークを広げる試みを続けていかないと、この活動は狭いものになってしまう。震災で被災した人たちが親を亡くした遺児たちがいる事実を風化させてはならない。

あるいは、もしかしたら東南海地震が起こるかもしれません。すると、また同じように遺児たちが生まれるかもしれないわけです。そうした場合には、必ずしも東日本大震災の遺児たちに限ったことではなく、われわれは活動を広げて続けていくんだという覚悟すら持っています。そのために、今日もこういう場を与えていただいたのですが、こうした場をたくさんいただいで、伝道師のようにみなさんに伝えていくしかないというのが本音です。

新聞広告にパブリシティを入れて宣伝する気はありません。この基金については企業のマーケティング

ング活動を一切しないというのが三社の決意なんです。社会貢献とはそういうものだから、これを売り上げなどにつなげるなんてことはさらさら考えていないのです。そしてそういう意思に賛同していた企業が、われわれの活動に加わっていただければと考えています。おそらく行政や官僚に比べれば、日本の民間企業の方がまだまだ健全だと私は思っています。そのネットワークは必ず広がると思っていますし、先ほどのスターバックスさんをはじめ、現在、エバラ食品さんが手を挙げてくれているなど、九州、中国、四国のさまざまな企業から、二五年一緒にやろうという声が上がりに始めています。

こういう活動のもうひとつ重要な側面というのは、現場で活動をしているかどうかです。実は現場で活動していない方々が多すぎる。これが決定的なんです。だから実感がずっと継続しない。とにかく現場での活動しかない。現地に行つて、とにかくひたすら高校まわり、子どもたちに会うことを三六五日ずっと続けることで、現地の信頼が得られて、現地に根付き、広がり、基金が相互に生きていくのだと思います。今、現地で三五の支援団体が活動していますが、実態としては現場で地を這って動いているのはそのうちきわめて少ない。思いついたように三月になると行くといった団体がほとんどだと、きつい言い方ですが、私は思っております。

Q4 学生B (理工学部1年生) みちのく未来基金はカゴメ、ロート製菓、カルビーの三社で始められたわけですが、そもそも別々にこういう活動をやろうと計画があり、それがまとまってかたちになったのですか？ それとも一社が提言して、それを他の二社が賛同したのでしょうか？

A 実は三社の経営幹部は古い友人同士で、個人的なネットワークもあります。東日本大震災後、三社

のメンバーたちが集まった時に、この活動を最初に提言したのはロート製菓の山田会長です。その背景には山田会長自身の体験がありました。ロート製菓は大阪に本社がある会社で、神戸の震災を経験し、彼は積極的な支援活動を展開したんですね。そんな彼が東日本大震災後の集まりで「神戸でやり残したことがある。非常に悔いが残る」と言ったんです。「山田さん、それは何？」と聞いたら、「神戸の子どもたちは誰も帰ってこなかった。建物だけは立派にできたけれど、子どもはひとりも帰ってこなかった。大事なものはその地で生まれ育った子どもたちの支援をすることだと思う」と言ったわけです。これが最初のきっかけです。ですから、そこにいたメンバーの会社が中心になって、この基金がスタートしたわけです。

スタートはある意味、思いつきです。でも、この思いつきが意外に大事なんです。問題は、その思いつきをいかに具体的に実現して、実行に移していくか。そこがプロの集団には問われます。

東日本大震災直後には、おそらくあちこちでこういうことがあったと思います。誰にも何か感じる心があるし、やっぱり人は一人で生きてはいけないことを、みんなよくわかってるんですね。震災ではいろいろなことが起こり、それぞれに対してたくさんのお話をやらなければいけないと思ったでしょうが、結局何かに特化しないと、こういう活動はうまくいきません。われわれはそういうことを特に遺児に特化したわけです。もちろん、震災遺児以外にもサポートが必要な子どもはたくさんいるわけですが、そこまでできるのかというところできません。そんなことも同時に考えながら進めてまいりました。

Q5 理工学部教授 三・一一の時に副社長として震災対策などにあたっていらっしやったと思うので

すが、最初の質問に対するお答えで、震災対策と同時にまず遺児に頭がいったところがございます。そこを考えが行ったのはどうしてでしょうか？

A 実は、三・一一のその日にすぐに遺児に考えが行ったわけではありません。我が社もあの地震によって宇都宮工場がたいへんな被害を受けましたし、仙台の事業所も崩壊して、仙台の社員、あるいはその家族の支援などをしなければなりませんでしたが、全国の製品供給をどうするかといったことも急務でした。そうしたすべてを含めたことに対して、私は対策副本部長として十一日当日から着任しました。

ところがしばらくしてから、現地にいた社員たちが被災した子どもたちと会うようになり、彼らの悲痛な声私たちがのところにどんどん入ってくるようになったのです。そして、四月二十日にロート製薬の山田さんとお会いして、先ほどご紹介した彼の一言がなぜか私の胸の中にずっと響いたわけです。そんな経緯があつて、会社の対策副本部長をやりながら、この基金の準備をすることになりました。

今、思うと、あの期間はとんでもないことをやっていたわけです。人間、できるものです。強い意志と「何をしなければいけないか」という自分自身の使命に対するコミットメントさえあれば、実現不可能なことはないのだと、この基金設立を通じてつくづく思います。人間はあれもこれもできるんです。ひたすら信念さえあればできる。そういう思いがあります。

私は仙台の生まれだったので、友人も亡くしました。おそらくそうしたいろいな思いが自分の中に錯綜していたという気も、今思うとあります。それがなぜか遺児に向いてしまったとしか言いようがないですね。論理的に説明しろと言われてもなかなか説明しにくい。そんなお答えになります。

Q6 学生C(理工学部1年生) 私は学生なので、お金もあまりありませんし、時間もありません。でもやっぱり何かしてあげたいなという思いはあるのですが、学生にできることは何かありますか？

A 先ほど紹介したスターバックスのスタッフたちの「ハチドリの一滴」でいいと思うんですよ。「何かをやらなければいけない」と思う必要はありません。自分にできることを自分で考えてやればいい。自分ができることを自分で考えないと、答えはでないんです。人から「あれをやればいい」「これをやればいい」と言われても、それは自分の答えではない。それはこういうボランティア的なことに限らず、自分がやることに對する答えを持つているのは自分しかないと思うべきだと、私は考えています。

私は最近まで人事総務本部長をしております、新卒の採用や若い社員たちへの講話などを担当していて、若い人たちに「みんないろいろな人やさまざまなことに出会えうけれど、自分なりの答えを出せばいい」とよく言っていました。大きさは関係ないんです。それでいいと思いますよ。「ハチドリの一滴」の「わたしはわたしにできることをしているだけ」という、このフレーズが大事だと思います。それは行動でなくてもいいかもしれない。自分がそういう気持ちはずっと持っているだけでも、それが「ハチドリの一滴」になるかもしれない、私は思います。

Q7 理工学部教授 先ほど子どもたちに接する時に、「温かく、しかし甘やかさず」心がけているとおっしゃっていました。これはわれわれ教育に携わっている人間にとつても共感する言葉なのですが、遺児たちの「温かく」と「甘やかさない」の垣根は、そうでない子どもたちのそれと違うところにあるのでしょうか？ それとも普通の高校生や大学生と変わらないのでしょうか？

A 変わりませぬね。みんな普通の大学一年生です。ただ心の中にしまっていることがあるというだけですね。

特に地元を離れて東京などの大学に来ている子は、自分が震災を経験した、あるいは遺児であることを周りの人に話していませんでしたが、この秋ぐらいから何人かが話し始めたようです。ある子は、ゼミの中で「実は私は……」と話したと言うので、「どうして?」と聞いたら、「やっぱり私が伝えなくてはいけないと思った」と言っていました。これまではそういうことを話すと、同情の言葉をかけられたいするのが嫌だったし、あの日のことについて同じ話を何度もしなければならぬのも嫌だった。そんな自分の心の葛藤を言うのも嫌だったから、話したくないと思っていた。でも半年経って、やっぱり自分が自分の口で言わないと、あの自分のふるさとは戻らないと思ったから、話し始めたのだと。その子たちは普通の子です。遺児だから特殊ではない。ただ強い決心があるなというのは感じますね。

慶應の学生のみなさんは向学心が強いと思いますが、一般的に高校を卒業して大学に入った子の場合、真剣に勉強する子は三割ぐらいしかいないのではないかと私は感じています。でも、一期生の九六人の遺児たちと面談していると、彼らは必死です。もし彼らがこの経験をしなかったら、おそくこんなふうになんか真剣に学ぼうという姿勢にはならなかったんじゃないかと思えます。なぜ彼らがこんなに真剣に学ぶのか、不思議でしかたありません。ある種、思い詰めるものがあるのかもしれない。逆に言うと、肩の力を少し抜かないと、つらいのではないかと思うこともあります。結局、そうならざるをえなかったのでしょうかね。もともと向学心が高かったわけでもなんでもありません。普通の十八歳だったのだけれど、震災の経験によって、何かを自分の中に持たざるをえなくなってしまうとしたらしか言えないですね。